

研究代表者 所属・職：国際福祉開発学部・准教授

氏 名：カースティ 祖父江

研究課題名：知多半島にいる定住外国人の現状と地域共生に向けての課題の可視化

研究の概要

本研究活動の目的は、異文化理解による地域共生の促進と、国際福祉開発学部 3 年ゼミ生との共同作業による SNS を使った取り組みを企画し、知多半島や愛知県の留学生や、外国にルーツを持つ児童生徒の生活の「見える化」である。

ここ数年、真面目に学習に取り組まず「資格外活動」(アルバイト)を過剰に行う留学生や、従来の教育制度に「負担」をかけているとされる外国にルーツを持つ児童生徒の報道が多く見られる。本研究の取り組みにより、留学生や該当する児童生徒の現状から見出せられるネガティブな側面より、こういった若者の努力、成長、達成や社会貢献といったポジティブな側面を発信し、「支援の対象」にしがちな味方より、日本人と平等に頑張っている現状を発信することを目指したい。そのために、次の取り組みを計画し、課題の解決に貢献し、成果を挙げることを目標とした。

取り組み 1) 昨年度の「地域課題解決型研究」の成果物である動画「みんな愛知県民」に引き続き、知多半島や愛知県に生活している外国人の現状を明らかにする動画作成

取り組み 2) 3 年ゼミ生を中心に 2020 年 4 月に立ち上げた、ryugakusei_project というインスタグラムアカウントから、最大限に個人情報を守りながら、知多半島や愛知県に勉強している留学生や、小・中学・高校で勉強している外国にルーツを持つ児童生徒を紹介し、それぞれの生活のポジティブな側面を重点的に紹介する SNS 活用

取り組み 3) 申請した時点でコロナウィルスのために発表されている緊急事態宣言が解除される場合、上記の活動の延長線として、知多半島にある学校などに対して、国際の留学生を含むゼミ生が出かけ、生徒たちと一緒に多文化社会や平等などについて考えるきっかけとなるワークショップの

開発

研究成果内容

達成状況・成果内容

新型コロナウイルスの感染状況により、2020 年度のほとんどのあいだは学外を対象にする研究活動が許されなかった。したがって、上記の取り組み 1) に対する成果は現在のところ得られていない。しかし、2) と 3) において下記のような成果をあげることができた。

取り組み 2) の成果

2020 年 4 月に @ryugakusei_project というインスタグラムのアカウントを学生中心に立ち上げ、準備期間をへて 7 月に投稿を始めた (https://www.instagram.com/ryugakusei_project/)。各投稿には一人の留学生の写真と、その学生の日本に来る前の生活、来日したきっかけ、日本での生活についての考え方やエピソードなどを 1000 文字程度で纏められたストーリーが含まれている。投稿はゼミ生が留学生にインタビューをすることによって作成され、写真は学生が撮ったり、留学生が提供したりすることによって入手している。投稿の内容は基本的に学生に任せられているが、企画の趣旨は「留学生支援」ではなく、「お金のためにしか日本に来ていない」などの風評被害や「留学生がかわいそう」という若干「上から目線」の見方に対抗し、「普通に頑張っている」留学生の日常や彼らの視点の「見える化」であった。

現時点では @ryugakusei_project には 46 回の投稿を通じて、ベトナム、フィリピン、中国、ウズベキスタン、ネパール、インドネシア、スリランカを出身国とする 32 名の留学生等愛知県で積極的に学びや仕事に取り組んでいる外国人の「日常」を

紹介することができた。コロナ禍において、幅広く外に取材ができなかったが、日本福祉大学以外には市民研究員となったグエンヴァンタンのご協力によって星城大学、愛知学院大学、中京大学の留学生に加え、日本福祉大学の中央福祉専門学校の学生や、介護の現場で働いている技能実習生も紹介することができた。また、2021年3月から、愛知県民にさらに外国人の「日常」を知ってもらうために、@ryugakusei_project で紹介した写真やインタビュー文書（ストーリー）が入っているポスターが中区役所の市民課や愛知県の生涯学習センターで展示されており、このポスター展を中日新聞や毎日新聞に取り上げていただいた。

さらに、@ryugakusei_project が大学の中での多文化共生促進に効果があることが調査によってわかった。特に2020年度に入学した国際福祉開発学部の1年生は前期を通して授業がほとんど遠隔になったため、学生同士が顔を合わせて交流できる場が著しく減少したことによって、本学部の留学生と日本人学生は互いの姿が見えにくい環境に置かれていた。そこでゼミ生による留学生へのインタビューや写真などをSNSなどで発信することで、留学生の存在を「見える化」ができ、学部生同士の距離を縮め、学部内の多文化共生の維持する効果が見られた。2020年10月下旬に、上記の活動について本学部の学生、教員、職員そして大学部外の閲覧者数名を対象にアンケート調査を実施し、95名の回答を得た。その内訳をみると65名は「日本人学生、あるいは家族滞在など、留学生ではない在留資格を持っている学生」（以下、「日本人学生等」と言う）で、23名は留学生、2名は大学教員、1名が大学職員、4名が大学部外者であった。調査はGoogle Formsを用い、Instagram@ryugakusei_project について知っているか、読んだ/見た感想、良いと思うもの、読んだ/見た後の留学生に対する意識の変化などについて尋ねた。また、学生のみを対象に、留学生には日本人学生と、日本人学生には留学生との付き合いの程度や、もっと仲良くなりたいと思うか等について

尋ねた。

調査のためにインスタの投稿を見てもらい、印象に残ったものを聞いた。印象的だった投稿には特に偏りがなく、ほぼ全ての投稿が複数名の「印象に残った」対象になった。写真が「印象に残った」理由として、「ほのぼのさせていただいた」、「笑顔がかわいい」、「フレンドリーな人に見える」、「すごくいい笑顔をしている」、「民族衣装に好感を持ちました。とても素敵だった」、「素敵な笑顔で天然で見入っちゃいます」などがあつた。また、インタビューの内容が印象に残った理由を聞いたところ、「深く人生について語る能力と日本語力に圧倒されました」、「生きる難しさや楽しさをあわらしていた」、「～さんが日本で留学生として経験した気持ちに刺激を受け、理解しました。私はとても感動し、誰もが自分の問題を抱えていることを理解しました」、「留学してすごく勉強もしていて明確な目標があつてすごいなつて思った」、「親に迷惑をかけないように自分で学費や生活費を払っていることがすごいと思った」、「日本に来て困ることが多いはずだけどとてもポジティブにとらえていていいと思った」、「留学生の日常と留学生の愛嬌と情緒溢れる姿がインタビューから伝わってきた」のように、読んだ人の反応が全てポジティブの方向に意識が変わつたことが窺える反応であつた。

留学生の性格やイメージについての感想、思つていたのと違つた、理解が深まつたという回答が多数を占めたが、自分たちと同じ、若くは似ていると感じたという回答もいくつか見られた。その他、自分自身の行動に対する考えの変化が窺える回答も見られた。

今後の意思について留学生を除く65名に「もっと留学生と仲良くしたいか」と聞いたところ、44名(67.7%)が「とても仲良くなりたいたい」、17名(26.2%)が「ある程度仲良くなりたいたい」と答えた。「あまり仲良くなりたいたいと思つていない」と答えたのは1名(1.5%)であつた(未回答3名)。調査の時点で学外のプライベートでも留学生との付き

合いがあると答えた学生は 16 名 (24.6%) であったため、理想と現実のギャップをどう埋めるかが今後の課題ではあるが、留学生に対する意識の高さには以上の取り組みが関与していると考えられる。上記の調査の結果から見えるように、SNS の取り組みを見て日本人学生等も留学生も互いに「とても仲良くなりたい」と思っていたことが明らかであり、この取り組みには一定の成果が上がっていることが分かった。上記の調査結果は、第 7 回言語文化教育研究会年次大会で発表させていただく機会もいただいた。

取り組み 3) の成果

小学校などでの多文化共生ワークショップはコロナのためにまだ実現していないが、現在では東海市、半田市、知多市、武豊町の小学校関係者と連絡を取り合いながら、今後展開する機会を検討している。

今後の展望

コロナの感染拡大が治らないと学外でこれ以上の展開が難しいと考えられるが、SNS の発信は 2021 年度の専門演習の学生が引き継ぐ予定であり、@ryugakusei_project の活動は継続する予定である。